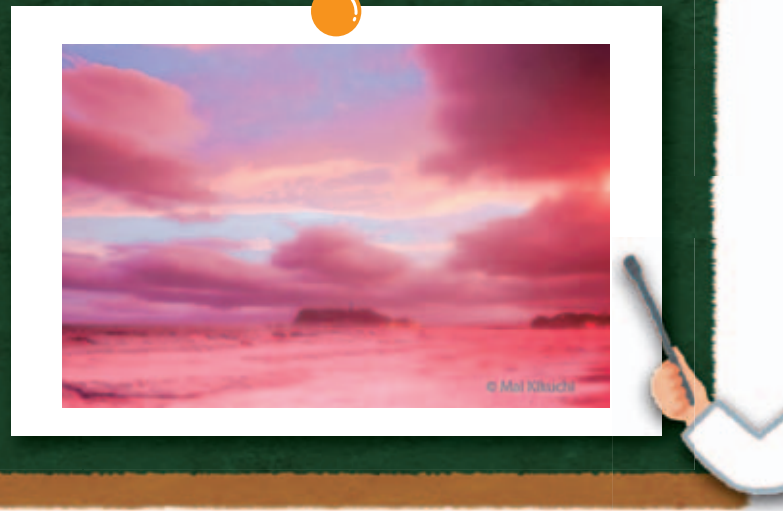


気象キャスターが解説!
天気のみかた

連載 第12回 夏の空を
見上げてみよう
気象キャスターネットワーク



「今日はどんな雲が出ていましたか？」気象キャスターネットワークの夏休みのイベントで、子供達に最初によく聞く質問です。子供達は「丸い雲が出てた」とか「大きな雲を見た」とか、すぐに元気に答えてくれます。一方で、一緒にいるお父さんやお母さん達は、「うーん、晴れていたのは覚えているのですが…」といった回答が多く、大人になると、空をじっくりと見上げる機会は少なくなりますよね。でも、頻繁に空を見れば、気象予報士でなくても天気を予想することができますし、思いがけず、とびきり美しい空の景色に出会うこともできます。たまには、ゆっくりと空を観察してみませんか。夏休みの宿題に困っている小中学生のみなさんは、空の観察日記にチャレンジしてみるのも、面白いかもしれません。

空を見て、天気の急変を予想しよう

夏の雲の代表と言えば、入道雲(積乱雲)です。夏の風景画には、必ずといっていいほど描かれていて、私も子供の頃は、もくもくとした大きな姿がカッコイイなあとよく思っていました。でも、入道雲の下では、激しい雨が降ることがあり、天気の急変に気をつけなくてはなりません。入道雲は、地上からおよそ13kmの高さにも成長して、中にはたっぷりの水分を含んでいます。それが雨となって一気に降り、雷を伴うこともあります。よく晴れた夏の夕方、急に雨がざーっと降ることがありますね。この夕立も入道雲の下で起きるものです。

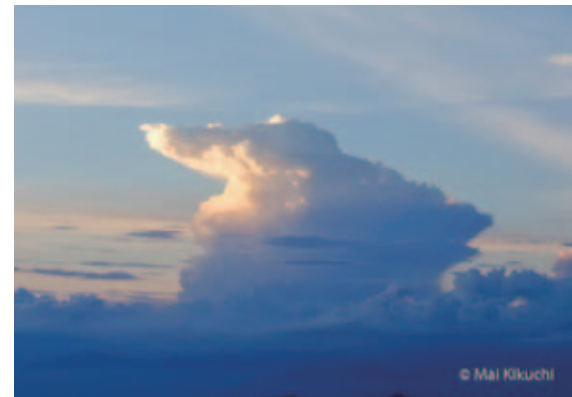


左の写真は入道雲が成長していく様子です。大きな雲があると思っていたら、あっという間に縦や横に広がり、20分ほどで雷雨になるほどの大きな入道雲になりました。入道雲の成長は速いので、晴れていても注意が必要です。

そして、特に気をつけたのが、かなとこ雲や頭巾雲です。入道雲は上へ上へと成長していきますが、も

うそれ以上、上に成長できないほどの高さになると、こんどは次第に横へと伸びていきます。かなとこ雲という、金属などを加工する道具に似ていることから、かなとこ雲と呼ばれるようになりました。

また、入道雲の対流が活発になっているとき、上の部分が頭巾のように丸くなることがあります。



かなとこ雲

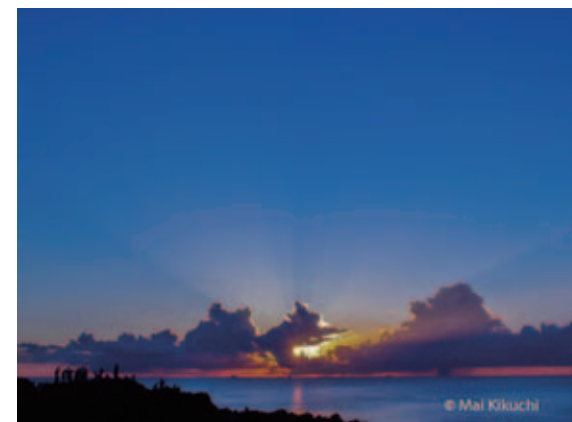


頭巾雲

夏休みのレジャーは、近くに入道雲がないか、かなとこ雲や頭巾雲になっていないか、こまめに空の様子を確認して下さい。危険を感じたら、雷雨だけでなく、電が降ったり、竜巻が発生したりすることもあるので、時には早めにレジャーを切り上げて、頑丈な建物の中に避難することも大切です。川の下流にいるときは、上流の方もチェックです。入道雲が上流で雨を降らせると、下流で晴れていても、川の水が一気に増える恐れがあります。

空を楽しもう

夏はダイナミックな夕空に出合えるチャンスです。湿気たっぷりの空が、驚くほど真っ赤に染まることがあります。また、入道雲が夕陽を遮ると、放射状の光の線が空に伸びます。薄明光線という現象です。海など、空が広く見える場所で観察するのがオススメです。



薄明光線

夕陽が沈んだら、こんどはブルーモーメントの時間がやってきます。真っ暗になる前に、空の色が一層、青く輝く瞬間があります。このブルーモーメント



ブルーモーメントの空

の空が見られる時間が、夏は比較的長くなります。写真は、見上げた空を180°写る魚眼レンズを使って撮影したものです。

そして、少し先になりますが、夏の終わり頃に秋の気配を、空に感じることができます。秋のうろこ雲やひつじ雲、刷毛で描いたような雲は、空高いところに現れます。夏の入道雲と、秋の雲が一緒に出ている空を「ゆきあいの空」と言います。ぜひ、夏と秋の季節がゆきあう頃になったら、見つけてみて下さい。写真は、飛行機の上からと、富士山の中腹から撮ったものです。高いところから、ゆきあいの空を見るのも面白いですよ。



飛行機から撮影



富士山中腹から撮影

菊池 真以

Profile

NHK 気象キャスター。
気象予報士、防災士。
茨城県出身。
龍ヶ崎市ふるさと大使。慶應義塾大学法学部政治学科卒業。
大学在学中にウェザーニュースお天気キャスターに。民放やNHK大阪放送局をへて、2015年4月からNHK東京の気象キャスターを務める。趣味は写真撮影で、2016年に「空の写真展IRODORI」、2017年「めぐる季節」開催。著書に「12ヶ月のお天気図鑑」など。

